

【A年】待降節第4主日(2024年12月22日)

【旧約聖書日課】イザヤ書 7章10～14節

¹⁰主は更にアハズに向かって言われた。

¹¹「主なるあなたの神に、しるしを求めよ。深く陰府の方に、あるいは高く天の方に。」

¹²しかし、アハズは言った。

「わたしは求めない。主を試すようなことはしない。」

¹³イザヤは言った。

「ダビデの家よ聞け。

あなたたちは人間に

もどかしい思いをさせるだけでは足りず

わたしの神にも、もどかしい思いをさせるのか。

¹⁴それゆえ、わたしの主が御自ら

あなたたちにしるしを与えられる。

見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み

その名をインマヌエルと呼ぶ。

【使徒書日課】

ヨハネの黙示録 11章19節～12章6節

¹¹¹⁹そして、天にある神の神殿が開かれて、その神殿の中にある契約の箱が見え、稲妻、さまざまな音、雷、地震が起こり、大粒の雹が降った。

¹²¹また、天に大きなしるしが現れた。一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。²女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた。³また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、火のように赤い大きな竜である。これには七つの頭と十本の角があって、その頭に七つの冠をかぶっていた。⁴竜の尾は、天の星の三分の一を掃き寄せて、地上に投げつけた。そして、竜は子を産もうとしている女の前に立ちはだかり、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。⁵女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖ですべての国民を治めることになっていた。子は神のもとへ、その玉座へ引き上げられた。⁶女は荒野へ逃げ込んだ。そこには、この女が千二百六十日の間養われるように、神の用意された場所があった。

【福音書日課】マタイによる福音書 1章18～23節

¹⁸イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。¹⁹夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。²⁰このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。²¹マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」²²このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

²³「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

【聖書協会共同訳】(2018年版)読み比べ

イザヤ書7章10～14節

¹⁰主はさらにアハズに語られた。¹¹「あなたの神である主にしるしを求めよ。陰府の深みへと、あるいは天へと高く求めよ。」

¹²しかし、アハズは、「私は求めません。主を試すようなことはしません」と言った。

¹³イザヤは言った。

「聞け、ダビデの家よ。あなたがたは人間を煩わすだけでは足りず、私の神をも煩わせるのか。

¹⁴それゆえ、主ご自身があなたがたにしるしを与えられる。見よ、おとめ〔直訳→若い女〕が身ごもって男の子を産み、その名をインマヌエル〔神は我らと共にいる〕の意〕と呼ぶ。

ヨハネの黙示録11章19節～12章6節

11¹⁹そして、天にある神の神殿が開かれ、その神殿の中に契約の箱が見えた。すると稲妻、轟音、雷鳴、地震が起こり、大粒の雹が降った。

12¹また、天に大きなしるしが現れた。一人の女が太陽を身にまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。²女は身ごもっている、産みの痛みと苦しみのため叫んでいた。³また、もう一つのしるしが天に現れた。それは巨大な赤い竜であって、七つの頭と十本の角を持ち、頭には七つの王冠をかぶっていた。⁴竜の尾は、天の星の三分之一を掃き寄せて、地上に投げつけた。そして、竜は子を産もうとしている女の前に立ち、生まれたら、その子を食い尽くそうとしていた。⁵女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖であらゆる国の民を治めることになっていた。子は神のもとへ、その玉座へと引き上げられた。⁶女は荒野へ逃げた。そこには、この女が千二百六十日の間養われるように、神の用意された場所があった。

マタイによる福音書1章18～23節

18イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが分かった。¹⁹夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表沙汰にするのを望まず、ひそかに離縁しようとして決心した。²⁰このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れずマリアを妻に迎えなさい。マリアに宿った子は聖霊の働きによるのである。²¹マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」²²このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

²³「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」これは、「神は私たちと共におられる」という意味である。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・12月22日「待降節第4主日」の日課主題は「告知」。伝統的な教会暦ではこの週に「降誕祭前夜」を迎えるが、日本の多くのプロテスタント教会は、日曜日に「降誕祭」を祝うために前倒して「待降節第4主日」に「降誕祭礼拝」を設定してきた。石神井教会もこの慣例に倣うが、主日聖書日課は「降誕日」に差し替えず、「待降節第4主日」を用いる。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、預言者イザヤがアハズ王との対話の中で告げた預言の箇所。使徒書日課は、「ヨハネの黙示録」から、男の子の誕生と竜の妨害を描く幻の箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、マリアの夫ヨセフに対する男児誕生告知を物語る箇所。

旧約日課(イザヤ7章より)

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一に置かれた預言文書。概要は過去の資料「聖書と祈りの会 241127」なども参照。本預言書(の前半1～39章)は、前8世紀の南王国ユダで四代の王に仕えた宮廷預言者である「イザヤ」の預言とその活動記録について集成した文書であり、標題(1:1)の設定に即して読まれることが期待されている。すなわち、南王国ウジヤ王(在位＝前783～742年頃)の統治末期から同ヒゼキヤ王(在位＝前715～687年頃)の統治前半期(前700年頃)までの国際関係史的時代背景を踏まえて、各書に明示されている時代記述を道標として読解されることを、編集者は期待している。日課箇所は、登場するアハズ王(在位＝前735～715年頃)の時代を背景に、この章で描かれる具体的な政治的出来事に即して解釈される。

・アハズ王の時代は、長く南王国を従属させてきた北王国イスラエル・サマリア王権がアッシリア王国の軍事侵攻によって滅亡していった時期である。北王国は、サマリア王権を確立したオムリ王朝(前876～842年頃)を打倒して成立したイェフ王朝(前842～746年頃)が崩壊すると、地方権力が群雄割拠する戦国時代と化した。アッシリア王国の軍事行動に対抗するため、アラム・ダマスコ王権と同盟を組み、南王国に対しても自陣で行動を共にすることを要求していた。南王国アハズ王は、この北王国の要求を拒み、アッシリアに援軍を求めたため、アッシリア王ティグラト・ピレセル(在位＝前744～727年頃)がまずアラム・ダマスコ王権を滅ぼし、次いで次王シャルマネセル(在位＝前727～722年頃)およびサルゴン王(在位＝前722～705年頃)は北王国サマリア王権を滅ぼすに至った(前722年頃)。日課箇所は、この一連の出来事の過程、南王国アハズ王が北王国(「エフライム」と呼ばれている)の要求に屈するか、さもなくばアッシリアに頼るか、決断を迫られていた時期のこと(7:1～2を参照)。このとき、アラム王と北王国王は、南王国アハ

ズ王の退位と傀儡王の即位を要求していた(7:5~6参照)。このような情勢下、宮廷預言者イザヤは、アハズ王に対して、アラム・ダマスコ王権および北王国サマリア王権の目論見が実現することはなく、アハズ王のダビデ王朝がなお存続することを、後継王誕生の預言として告げたのである。アハズ王の後継王として後に即位することになるのが、アハズの子ヒゼキヤ王(上述)で、この王と「ヨシヤ王」は、「列王記」において「ダビデのような王」として評価されている。

・14 節後半は「マタイによる福音書」の降誕物語中に引用されて、キリスト教会において、主イエスの降誕を予示する「インマヌエル預言」であったとの解釈がされてきた。ただし、「イザヤ書」自体は、明確な歴史的背景のもとで、ダビデの王統が経たれることなく、アハズ王の正統な後継王が即位するであろう期待を告げているものであり、数百年後の未来を予示しているわけではない。

使徒書日課(黙示録 11~12 章より)

・「ヨハネの黙示録」は、新約正典の最後に置かれた黙示(啓示)文書。標題(1:1)の「黙示」は、ギリシア語「アポカリュプシス」の訳語で、通例は「啓示/現れ」などと訳される語。教会史上、本書を正典に編入する合意が形成されるまでには、西方で 300 年、東方では 1000 年の期間が要された。過去の資料「聖書と祈りの会 241120」なども参照。

・本書は、本書の証言者となっている「僕ヨハネ」が天使によって引き上げられた天上で見せられた幻の出来事を叙述すること(4~20 章)が骨格となっており、その上で、神の終末的な計画の実現が希望として提示されている(21~22 章)。本編と言える 4~20 章は、「イエス・キリスト」によって遂行されたと信じられた神の救済計画の展開を、黙示文学的表現を用いながら、「旧約正典」の表現を援用しつつ物語っているとみなせる。日課箇所は、「ダニエル書」後半に描かれる「幻」を援用・典拠としながら描かれる、誕生に際して命を狙われる一人の男児の誕生譚の最初の部分である。

・誕生に際して命の危機に見舞われる男児の誕生、というモチーフは、多くの神話や英雄伝承に見られ、「新約」中では主イエスの誕生譚にも組み込まれている(マタイ 2 章など)。これが、「ダニエル書」の幻を援用しながら物語られるのは、「ダニエル書」の幻が設定する主題の一つに「王の正統な後継者」の問題が含まれているからである。「ダニエル書」には、「バビロンの王ベルシャツアル」(7:1)の名、および「ダレイオス」(9:1)の名が挙げられて、それぞれの「治世」の時代が背景に設定されている。「バビロンの王ベルシャツアル」は、新バビロニア王国最後の王ナボニドス(在位=前 556~539 年)の皇太子で、父ナボニドス王が都バビロンにおける統治を放棄した治世後半に、都バビロンで実質的な王としてバビロニア王国の最後の時期を統治したとされる。父ナボニドス王は、新バビロニア王国創建のナボポラッサル王およびネブカドネツ

アル王の血統によらない篡奪王であり、息子ベルシャツアルも、父王存命中にかかわらず王権を事実上篡奪した者として、「ダニエル書」は彼を「バビロンの王」と呼んでいる。他方、「ダレイオス」は、キュロス王の確立したペルシア帝国でキュロスの家系から王位を篡奪した王として知られている。「ダニエル書」がこれらの王の治世下において受けたという「聖なる民の苦難」の期間を繰り返して「一時期、二時期、半時期」(ダニ 7:25、12:7)あるいは「日が暮れ、夜が明けること二千三百回」(同 8:14)と表現しているが、これは三年半の期間を指し、換算すると 42 週 1260 日(黙 12:6)となる。「ダニエル書」中では「1290 日」あるいは「1335 日」(同 12:12~13)という日数が挙げられている。

・「竜」は、広く神話世界で取り上げられる「蛇神信仰」の一形態を背景に、黙示思想における天上世界の一角を為す「悪神」の使いとして描かれている。本書の場面設定は「パトモスと呼ばれる島」(1:9)で、ギリシア文化圏に属するが、ギリシア神話の中心的聖所「デルポイ」の守護番人「ピュトン」は「蛇神」であり、この聖所に祀られる神「アポロン」には、母の胎に身ごもっていたときにピュトンに命を狙われたという伝承説話が知られている。無事に誕生したアポロンは、ピュトンを退治し、デルポイの神殿の脇にこれを葬ったとされる。日課箇所がこのアポロン伝承のパロディとして組み立てられているのは明らかで、「マタイ福音書」2 章に描かれる主イエスの降誕物語における危機の説話とも物語構成はほぼ一致する。ただし、このような物語構成は、神話・英雄伝承における定型パターンであり、一方が他方に依拠しているとは、必ずしも言えない。

・日課箇所は、明らかに主イエスの降誕物語を示唆するように構成されているが、同時に、この説話を主イエス個人を指し示すのみでなく、主イエスを信じる者たちの「教会」を指し示すようにしていると考えられる。本書は全体として、主イエスを示唆する者を描きながら、同時に、「迫害を受けながら耐える信者(の教会)」を「主イエス」と同一視することを意図している。

福音書日課(マタイ 1 章より)

・日課箇所は、主イエスの母マリアの「夫」として描かれる「ヨセフ」に向けた受胎誕生告知の説話。主イエスの降誕物語は「ルカ福音書」にもあるが、「マタイ」と「ルカ」では異なる伝承を降誕物語としている。受胎・誕生告知の説話も、「マタイ」がヨセフに対してなされたものとして描かれるのに対して、「ルカ」はマリアに対してなされたものとして描かれている。

・18 節「誕生の次第」と訳されている原語は「ゲネーシス」。この語は、本福音書冒頭に「ビブロス・ゲネーセオース」の形で用いられており、これを新共同訳は「系図」と訳している。「ゲネーシス」は、ギリシア語訳旧約聖書(七十人訳)で「創世記」の書名として用いられている語。本書は、「アブラハムの子、ダビデの子であるイエス・キリストの創世の書」(1:1 直訳)であることを意図して編纂され、日課箇所から本編である。

・23 節は「イザヤ書」7:14 の引用。本福音書は、「イザヤ書」をはじめとする預言書を直接引用して、主イエスの出来事を「預言の実現(成就)」と描写することを繰り返す。ただし、「預言」は隠されていた「啓示」とは異なり、「預言書」として公開されていたものであり、「預言の実現」は、「予め告げられていたことが意図なく実現したこと」とではなく、「告げられた神の言葉に従って意図して実現されたこと」と解されるべきである。

来週の誕生日 (12月22日～28日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-246「天のかなたから」(= I 101「いずこの家にも」)。M.ルターが自分の子供たちのために作詞作曲。当初は礼拝のための歌とはされていなかったが、次第に礼拝で歌われるようになった。
- ・21-260「いざ歌え、いざ祝え」(= I 108)は、18-19世紀ドイツで孤児院を運営していたヨハンネス・ファルクがルター劇のために作詞した1節、彼の同僚ハインリッヒ・ホルツシュアーが2節、3節を作詞して加えたものに、ファルクの友人であったヨハン・ヘルダーがイタリアで採譜したとされる曲「シチリアの船乗り」を組み合わせたもので、ドイツのクリスマス讃美歌として広く歌われるようになった。同じ曲が英語圏では別の歌詞(I 64「みかみよ、めぐみを」と組み合わせられて歌われている。また、「勝利をのぞみ」(21-471)は、この曲から着想を得たと考えられている。
- ・21-76「今こそ歌いて」は、中世最大の神学者トマス・アクィナスによる聖餐讃美の詞。曲はフランス教会旋律による。
- ・21-259「いそぎ来たれ、主にある民」(= I 111「神の御子は」)は、18世紀英国の写譜業者ジョン・ウェードが中世の聖歌として紹介して以来、教派・言語を越えて広く歌われるようになったクリスマスの歌。

21-246「天のかなたから」

Vom Himmel Hoch, Da Komm Ich Her

1. Vom Himmel hoch, da komm ich her. / Ich bring' euch gute neue Mär, / Der guten Mär bring ich so viel, / Davon ich singn und sagen will.
2. Euch ist ein Kindlein heut' geborn / Von einer Jungfrau auserkorn, / Ein Kindelein, so zart und fein, / Das soll eu'r Freud und Wonne sein.
3. Es ist der Herr Christ, unser Gott, / Der will euch führn aus aller Not, / Er will eu'r Heiland selber sein, / Von allen Sünden machen rein.
4. Er bringt euch alle Seligkeit, / Die Gott der Vater hat bereit, / Daß ihr mit uns im Himmelreich / Sollt leben nun und ewiglich.
5. So merket nun das Zeichen recht: / Die Krippe, Windelein so schlecht, / Da findet ihr das Kind gelegt, / Das alle Welt erhält und trägt.
6. Des laßt uns alle fröhlich sein / Und mit den Hirten gehn hinein, / Zu sehn, was Gott uns hat beschert, / Mit seinem lieben Sohn verehrt.
7. Merk auf, mein Herz, und sieh dorthin! / Was liegt dort in dem Krippelein? / Wes ist das schöne Kindelein? / Es ist das liebe Jesulein.
8. Sei mir willkommen, edler Gast! / Den Sünder nicht verschmähet hast / Und kommst ins Elend her zu mir, / Wie soll ich immer danken dir?
9. Ach, Herr, du Schöpfer aller Ding, / Wie bist du worden so gering, / Daß du da liegst auf dürrer Gras, / Davon ein Rind und Esel aß!

10. Und wär' die Welt vielmal so weit, / Von Edelstein und Gold bereit, / So wär sie doch dir viel zu klein, / Zu sein ein enges Wiegelein.
11. Der Sammet und die Seide dein, / Das ist grob Heu und Windelein, / Darauf du König groß und reich / Herrprangst, als wär's dein Himmelreich.
12. Das hat also gefallen dir, / Die Wahrheit anzuzeigen mir: / Wie aller Welt Macht, Ehr und Gut / Vor dir nichts gilt, nichts hilft noch tut.
13. Ach, mein herzliebes Jesulein, / Mach dir ein rein, sanft Bettelein, / Zu ruhen in meins Herzens Schrein, / Daß ich nimmer vergesse dein.
14. Davon ich allzeit fröhlich sei, / Zu springen, singen immer frei / Das rechte Susanne schon, / Mit Herzenslust den süßen Ton.
15. Lob, Ehr sei Gott im höchsten Thron, / Der uns schenkt seinen ein'gen Sohn. / Des freuen sich der Engel Schar / Und singen uns solch neues Jahr.

21-260 番「いざ歌え、いざ祝え」

O du fröhliche

1. O du fröhliche, O du selige, / gnadenbringende Weihnachtszeit! / Welt ging verloren, Christ ward geboren: / Freue, freue dich, O Christenheit!
2. O du fröhliche, O du selige, / gnadenbringende Weihnachtszeit! / Christ ist erschienen, uns zu versüßnen: / Freue, freue dich, O Christenheit!
3. O du fröhliche, O du selige, / gnadenbringende Weihnachtszeit! / Himmlische Heere jauchzen dir Ehre: / Freue, freue dich, O Christenheit!

21-76「今こそ歌いて」

Pange Lingua, Gloriosi Corporis Mysterium

1. Pange, lingua, gloriōsi Cōrporis mystērium, / Sanguinisque pretiōsi, / Quem in mundi prētium / Fructus ventris generōsi / Rex effūdīt gēntium.
2. Nobis datus, nobis natus / Ex intācta Vīrgine, / Et in mundo conversātus, / Sparso verbi sēmine, / Sui moras incolātus / Miro clausit ōrdine.
3. In suprēmæ nocte coenæ / Recūbens cum frātribus / Observāta lege plene / Cibis in legālibus, / Cibum turbæ duodénæ / Se dat suis mānibus.
4. Verbum caro, panem verum / Verbo carnem efficit: / Fitque sanguis Christi merum, / Et si sensus déficit, / Ad firmāndum cor sincērum / Sola fides sufficit.
5. TANTUM ERGO SACRAMĒNTUM / Venerēmur cernui: / Et antiquum documētum / Novo cedat ritui: / Præstet fides supplēmētum / Sēnsuum defectui.
6. Genitōri, Genitōque / Laus et jubilatio, / Salus, honor, virtus quoque / Sit et benedictio: / Procedēti ab utrōque / Compar sit laudatio. / Amen. Alleluia.

21-259「いそぎ来たれ、主にある民」

Adeste fideles, læti, triumphantes

1. Adeste fideles, læti, triumphantes, / Venite, venite in Bethlehem. / Natum videte Regem angelorum. / Venite adoremus, Venite adoremus, / Venite adoremus, Dominum.
2. Deum de Deo, Lumen de Lumine, / Gestant puellae viscera, / Deum verum, Genitum non factum. / Venite adoremus, Venite adoremus, / Venite adoremus, Dominum.
3. Cantet nunc "Io!" chorus angelorum; / Cantet nunc aula caelestium: / "Gloria in excelsis Deo!" / Venite adoremus, Venite adoremus, / Venite adoremus, Dominum.
4. Ergo qui natus Die hodierna, / Jesu tibi sit gloria! / Patris aeterni Verbum caro factum. / Venite adoremus, Venite adoremus, / Venite adoremus, Dominum.
5. En grege relicto, humiles ad cunas / Vocati pastores appropriant; / Et nos ovanti gradu festinemus; / Venite adoremus, Venite adoremus, / Venite adoremus, Dominum.
6. Stella duce, Magi, Christum adorantes, / Aurum, thus et myrrham dant munera. / Jesu infanti corda praebemus; / Venite adoremus, Venite adoremus, / Venite adoremus, Dominum.
7. Pro nobis erenum et foeno cubantem, / Piis foveamus amplexibus. / Sic nos amantem quis non redamaret? / Venite adoremus, Venite adoremus, / Venite adoremus, Dominum.